

臨界期後の英語音声指導のあり方について

荻原 洋

(2004年10月20日受理)

How should the English Phonetics be Taught after the Critical Period?

Hiroshi OGIHARA

E-mail : ogihara@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード : 英語音声学、きれいな発音、臨界期

Key words : English Phonetics, Better Pronunciation, Critical Period

0. はじめに

小学校における英語学習が盛んに行なわれるようになるにつれ、その成果や問題点に関する報告も多くなってきている。しかしそのほとんどは教え方の工夫に関するものであり、現実に子供たちがどのくらい英語を習得したかという報告は非常に少ない。これは実際に小学校で英語を教えている人々の中に第2言語習得(SLA)研究という視点がないためではないかと言われている。(Kimura and Otagaki, 2000)

早期英語教育を導入する理由はいくつかあるが、そのうちの1つは「早期に始めれば(特に)音声面において苦勞せずに母国語話者並みの能力を身につけることができる」というものである。音声面ということは、英語母国語話者の話す言葉を苦もなく聞き取り、母国語話者並みの発音で英語を話すことができるようになる、ということの意味する。

しかしこのような「理想的な学習」は、目標(学習)言語が日常的に用いられる環境で生活しながら身をもって言語習得が行なわれる、いわゆるSLA環境において一般的に行なわれるものである。

日本の小学校における英語学習にこのようなSLA環境を求めることはとうてい不可能だと断言することはできない。しかし、どの程度の環境を整えれば「理想的な」SLA環境になるのかということについて、科学的な研究に基づいた目安が設定されているわけではない。

このような状況の中で最も危惧されるべきことは、そして実際はほとんど危惧されていないかのような印象を受けるのだが、十分なSLA環境が準備されていないにもかかわらず早期に英語教育を始めているということだけである意味安心してしまい、CD等でauthenticな英語さえ聞かせていれば大丈夫というような安易な気持ちが教える側に生じ、音声面の指導がおろそかになってしまうということである。そしてさらに危惧すべきことは、そのような考え方が中学校、高等学校にまで及んでしまうことである。

実際、私が出会ってきた大学生や専門学校生で、それまでに英語の発音をきちんと学んだことがあると言っている学生は皆無に近い。

日本の英語教育で音声指導が重視されない理由は他にもあると思われる。その1つは、「一般に、

教師は自分が生徒として教えられたのと同じようにしか自分の生徒に教えられない」と言われているように、今の教師たち自身がきちんとした英語の音声指導を受けていないため、どうやって音声の指導をして良いか分からない、というよりする必要を感じない、あるいはそんなことを考えもしないということがある。さらに、英語の教員免許取得にとって英語音声学は必須科目ではないためそれを学ばなくても英語教師になることができる、という制度上の問題もある。

また、英語の時間数が減少する中でとても音声面での指導にまで時間をかけていられないという現場の悲鳴や、いくら発音が上手くなっても入試にはまったく役に立たないという経験則も影響していると思われる。このように多くの要因が絡み合って、英語教育における音声指導の重要性は軽視されてきているのである。

しかし、近年の科学技術の更なる進歩により、言語使用や言語習得の研究に大きな質的転換がもたらされ始めている。具体的には、脳内の血液や電流の流れを簡単に調べられるようになったおかげで、脳のどの部分がどのような言語能力(活動)を担当しているのか、また、言語はどのような仕組みを持って機能しているのか、というようなことが実証的に明らかにされようとしている。

心的辞書(Mental Lexicon)と呼ばれるものの仕組みの解明もその1つである。辞書というと私たちは無意識のうちに文字で書き表された単語の一覧表のようなものを思い浮かべてしまうが、私たちの頭の中にある辞書は単語を音的イメージで記録しているという。それは、私たちが書かれた文字を読んでその内容を理解しようとするとき、実際に声に出して読まなくても、脳の中で言語の音声化を担当する部分が活性化されているということから分かったのである。¹ (竹内、2000)

したがって、英語の音声指導が不十分ということは、英語の4技能の全ての土台となる語彙の知識が不十分な形でしか学習者の中に蓄えられてゆかない、ということの意味する。

さらに後述するアンケート調査からは、英語の発音に対する自信のなさが英語を使った活動や英語学習そのものへの消極的姿勢へと繋がってい

てしまうということが読み取れる。

本小論は、たとえ小学校段階で英語学習を導入しても十分なSLA環境が実現できない以上音声面での効果はそれほど期待できないため、全ての英語学習者はどこかの段階で一度は日本人に適した英語の音声指導をきちんと受けるべきであるということ、そしてそれが無い以上いつまでも本当の意味で英語の力が伸びてゆかないということを主張し、いわゆる臨界期後でも可能な実効性のある音声指導はいかにあるべきか、その方向性を模索しようとするものである。

1. FLA環境における音声指導

以下、本小論ではSLA環境と区別される意味での外国語習得(FLA)環境における臨界期後の音声指導の可能性について考える。この条件が外国語の音韻習得にとってもっとも困難と一般に考えられており、この条件下である程度有効な音声指導ができれば、日本の英語教育にとって大変意味のあることになるからである。

1. 1. 英語の音が聞き取れない

先に述べたように、第2言語習得や早期英語教育といった話題の中で一般的に期待されているのが「早い段階(臨界期前)に英語の音声をたくさん聞かせることができれば、英語母国語話者並みの聞き取りや発音の力が身につく」ということである。これについては既に多くの研究報告が行われておりあまり議論の余地はないと思われる。そして、それは日本で小学校に英語が導入される1つの大きな理由となっている。

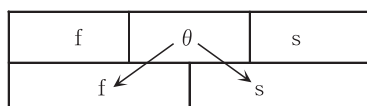
しかし、日本の英語教育を考えると、このような環境を手に入れることはよほど特殊な場合でもない限りありえない。ここで気をつけなければいけないことは、小学校に英語が導入され子供たちが英語に触れる時期が早まることによって、十分なSLA環境でないにもかかわらず、「母国語話者の英語に触れているのだから、英語の音声について指導する必要はないだろう」という暗黙の了解ができてしまうことである。

また、日本のような「お手本完全コピー型」の

学習社会では、母国語話者のお手本を聞かせてさえいれば、学習者の発音も自然とそれに近づいていく、と考えてしまいがち。²

しかし、ここに最初の大きな問題がある。それは、例えば日本の中学生が母国語話者の英語を聞く場合(既に述べたように、それが小学生でもFLA環境なので事情はあまり変わらないと言えるのだが)、実際に聞こえてくる音と日本人中学生が聞こえたと思っている音とは既に違ってしまっているという問題である。

下の図はO'Connor(1980)のものである(ただし、原典では/θ/のところはthというスペルを用いた表記になっている)。彼によれば、英語を外国語として学ぶ人たちが英語の音を聞き取れないのは、その人たちの母国語の音声に関する知識が邪魔して英語の音を正確に認識することができないからだという。



英語の摩擦音で、摩擦を生じさせる場所が口の外側に近いものを順に3つ並べると図の上の段のようになる。これに対して、同じ場所を使って摩擦を生じさせながらも /f/ と /s/ の2つの音しか区別しない言語もある。このような言語の話し手は英語の /θ/ の音を聞いたとき、頭の中にそれに相当する音のエントリーがないため、/f/ か /s/ のどちらかとして認識してしまう。これがいわゆる「範疇的知覚(Categorical Perception)」と呼ばれる、人間が言語音を識別する基本的な方略である。(竹内、2000)

つまり、私たちが外国語の音声を手で認識できないのは、日本語と外国語は別々の音の範疇を持っているため、どんなにたくさんその外国語を聞いてもそれを日本語の音の範疇に当てはめながら聞いているので、なかなかその外国語を聞いて理解するのに必要な範疇的知覚能力が伸びないという事情によるのである。

このような状況を改善するには、意識的に学習者の脳の中に「新しい音の範疇」を作ってあげなければならない。英語のリスニングが苦手な日本

人は少なくないと言われているので、このような作業は非常に困難なことに感じられるかもしれないが、筆者の経験からそれほど難しくない方法があると思われる。以下にその指導法(学習法)のあらましを述べ、実際それを体験した学生たちの感想を紹介したい。

1. 2. リスニングと発音指導の関係

筆者の勤務する大学の教養課程の英語の授業には、1年次の必修クラスの他に2年次で履修できる自由選択のクラスがある。この自由選択の英語のクラスは、担当の英語教員がそれぞれ自分でテーマを決めて学生に授業内容を前もって提示し、内容に興味関心のある学生がその授業を受講するというものである。筆者はこの自由選択の英語で定期的に英語音声指導のクラスを開講している。平成16年度は34名の単位取得者があり、以下は、その授業の内容とそれを受けた学生たちに実施したアンケートの結果である。(授業内容については一部荻原(2004)からも紹介している。)

この授業で行なっている英語音声指導の特徴は言語音の聞き取り練習と発音練習を平行して行なうところにある。まず英語の音素(英語という言語で用いられている音の範疇)の中から英語に特徴的でおかつ日本人に馴染みのないものを選び出す。摩擦音、破裂音、側音、鼻音、二重母音などがこれに当たり、これらは一般に日本人英語学習者には発音が難しいとされている。

これらの発音練習をする前に、まずこれらの音素の特徴に気づくことが必要である。というのも、自分の頭の中にない音を作り出すことはできないからである。そのためには「意味を聞き取るリスニング」ではなく「音そのものを聞き取るリスニング」をすることが極めて重要である。(詳しくは荻原(2004)を参照。)

摩擦音を例にとってみると、日本人英語学習者が英語の摩擦音を発音するのを聞くと、息の摩擦の音が非常に小さいことが分かる。これは日本語そのものに大きな摩擦を伴う音がないためであり、「息の摩擦でさえ弁別的な言語音(の一部)と成りうるのだ」という認識が完全に欠けているからである。そこで、初期の段階で何種類かの摩擦音を

1つ1つ聞き取る練習を行い、英語という言葉ではいかに摩擦の音が大きいかにつかせる。

私の経験から、この練習は1回10分程度で3～4回行なうだけで確実に効果が現れる。つまり、それだけ練習するだけで耳がそれまでとはまったく別のものを聞き始めるようになるのである。同じ英語の文章を聞いていても、一度摩擦音が気になり始めるとまったく別のものに聞こえてくる。

この練習は英語の勉強や英語の聞き取りが苦手な学習者でもまったく問題なく行うことができる。意味を聞き取らなくてよい(むしろ、意味を聞き取ろうとすると練習にならない)のだから、緊張することもなし、失敗に対する恐れもない。内容を聞き取るリスニングの場合、「自分は英語が苦手だ」とか「英語が聞き取れない」と思っている学習者は、最初からリスニングに対して消極的になってしまうのでいくら練習してもほとんど効果が上がらないということがあるが、この練習法ではそういう学習者でも効果がある。臨界期後、すなわち思春期に入るところから、外国語の学習には情意フィルター(Affective Filter)と呼ばれるある種の抵抗感が強く見られるようになるため、そのような抵抗感を少しでも小さくするための工夫は非常に大切である。

次に、そのようにして聞き取った英語の音を自分で発音させてみる。これをやる一番の目的は、自分で発音することによって自分の耳(脳)にフィードバックを与えることである。摩擦音に耳が慣れたとはいえ、それが確実に脳の中で「新しい音の範疇」として定着したかどうかは分からない。そこで、実際に自分で発音してみることによってそれが定着しているかどうかを確認することができる。

この発音練習においても、日本人学習者に少しでも適したやり方を工夫することが大切である。筆者は主に2つの工夫をしている。1つは、「新しい音の範疇」を脳の中に作ることを目的なので、実際の英語音よりも「特徴的な部分を強調して」発音させるようにすることである。例えば摩擦音 /f/ の練習では、下唇と上の歯で作る摩擦の部分をかなり長めに発音させるようにする。fine という単語を「ファイン」と発音させるのではなく、

「フー——ファイン」というようにとにかく摩擦の部分に十分すぎるぐらい十分に発音させる。

このような発音練習をすると変なクセがついてしまうのではないかという心配が出てくるかもしれないが、経験上、普段摩擦音を発声していない日本人にはこのくらいがちょうどよい。このくらいオーバーに発声していても実際に英語を話すときにはそれほど摩擦の音は大きくならないからである。そんなことを気にするよりも、摩擦の大切さを肌で感じるほうがよほど意味があると思われる。多少極端な言い方が授業で「英語母国語話者はこの摩擦の音を聞いているんだよ」と学生に言うと、すでに英語音を聞き取る練習をしている学生は摩擦の音が耳についているので、抵抗なく納得するようである。また、このくらい大きにすると、かえって恥ずかしさがなくなり、楽しく練習できるようである。ある学生はアンケートに「(慣れない音を出すため)変な顔になっても、みんな恥ずかしがらずに一生懸命発音練習しているのを見て感心した。いい雰囲気だった」と感想を書いている。

Levelt(1989)のSpeech Production Modelによれば、自分の発した言葉は自分の耳にも届いて自分自身に対するフィードバックになる。このことは英語の発音練習においては特に重要である。というのも、既に述べたように、日本語の音の範疇が既に脳の中に確立されている場合、いくら英語音を聞いてもそれが英語の音として脳の中にインプットされていかないからである。それに対して、英語の音の特徴を強調して発音することにより、その音声は自分の耳を通じて自分の脳の中に「より正しいイメージ」の英語音としてインプットされていくことが可能になる。

もう1つの工夫は、実際に誰かに自分の発音を聞いてもらうようにすることである。「摩擦の部分を強調し過ぎるぐらい強調して発音しなさい」といくら指示しても、口の周りで「ゴニョゴニョ」という感じで練習してしまう学習者が多い。これは普段からあまりはっきり物事を話さない日本人の話し方の習慣にも起因するのかもしれない。また、帰国子女があまりにきれいな「外国人っぽい」発音をするとクラスで浮いてしまうので、いつの

間にか日本人のような「訛った」発音に変わってしまおうということから分かるように、集団の中で目立つことを嫌う(目立つと周りから浮いてしまう)という習性による部分も大きい。実際アンケートに「英語らしく発音することは恥ずかしいと感じていた」と書いている学生もいるぐらいである。

しかしそれでは英語音の特徴を耳(脳)にフィードバックすることはできない。そこでペアを作って、お互いに相手の発音を聞き合うようにする。発音する側には「特徴の部分を強調してそこが相手によく聞こえるように発音しなさい」と指示し、聞く側には「その特徴の部分がきちんと聞こえてくるかどうか確認してあげなさい」(摩擦音の練習では「大きな摩擦が出ているかどうか聞いてあげなさい」と指示する。

SLA研究では、いろいろな学習活動においてペアワークが非常に効果があることが分かっている。これは多人数のグループワークと違いペアワークでは学習者全員が活動に参加せざるをえないという利点によるところが大きい。

ただしペアワークがうまく機能するかどうかは2つの大きな要因による。1つはペア間の能力差であり、もう1つはペア間の相性である。ペア間の能力差に関しては、能力差がない組み合わせがいつも良いというわけではなく、学習活動(課題)の性質や難易度、あるいは課題の中で行なう役割等によっては能力差があるほうが効果があるという報告もなされている。(Lightbown and Spada, 2000)

今回の学習活動で要求されている課題は、英語の力とあまり関係なく取り組むことができるものであり、ペアの能力差の問題はほとんどないと言ってよい。実際大多数の学生はこのような練習方法を評価している。さらに、受講した学生の中には英語が苦手という学生が数名いたが、彼らのほとんどがこの練習方法を評価し、効果を認めている。この最後の点については今後実験的な手法で証拠を積み重ねていくだけの価値が十分にあると思われる。

ただ少数ではあるが、先に述べたような「お手本完全コピー型」の学習習慣が身についているた

め、学生同士でお互いの(不十分な)英語の発音を聞き合っただけを「評価し合う」ことを不安に感じている学生がいたことも確かである。これには、自分が正しく発音できているのかどうかという不安と、相手の発音を正しく評価できているのかどうかという不安の両方が含まれている。

英語らしい発音は一朝一夕に手に入るものではなく多くの時間をかけて練習を積み重ねて初めて少しずつ英語らしくなっていくものである、ということは何度説明しても、常に「正しいもの」しか認められないという学習環境で学んできているため、なかなか急には適応できないようである。³ そのような学生は例外なく指導教員に直接自分の発音を確認して欲しいと願っているが、これはクラスサイズの問題であり簡単には対応できないので、この不満を解消するための工夫が必要となるであろう。

ペアワークのもう1つの問題は、ペアを組む学習者同士の相性の問題である。苦手な(嫌いな)相手とペアになった場合、ほとんど学習効果は期待できない。今回の授業は、自由選択の単位なので、受講生は学部も違えば学年もバラバラという状態である。ただ、友達同士で誘い合って履修している者もあり、結果的には半数ぐらいの学生がお互いまったく知らない者同士でペアを組むことになった。またそのペアも毎時間固定していたわけではなく近くに座っている者同士で組むようにしていたので、そのようなペアになった学生の何人かはアンケートの中で不満を訴えていたので、この点は必ず何らかの方法で改善されなくてはならない。

発音練習をペアですることにはもう1つ別の副次的なメリットがある。それは「話すときは相手に届くように話す」という基本中の基本を体得させることができる、ということである。ペアで会話練習をしていても、教科書の英文を読んでいるだけでお互いに顔を合わせていないというような光景はどの英語クラスでも見ることができる。聞くほうも教科書の英文を見て聞いているので、相手の声がきちんと聞こえていなくてもまったく関係ないのである。これではいつまでたっても会話ができるようにはならない。相手の耳に自分の生の声を届かせるという努力が必要なのである。

今回の発音練習で、例えば摩擦の音を相手の耳に届かせようと思えば、相手のほうを見て「思い切って」声を出さなければならない。普段日本語を話しているときには出さないような音なのでかなり一生懸命相手に向かって発しなければならない。「コミュニケーションする」とはこういうことなんだと感ずることができるのである。

以上、改善すべき点はいくつか残されているが、このような音声指導の方法は、英語が苦手な学習者でも気楽に取り組むことができ、指導自体も難しいものではなく、しかもリスニングと発音の両方の面で効果が実感できる、さらには、コミュニケーションに対する「心構え」も学ばせることができる、というような多くのメリットがあると思われる。

アンケート結果を見ると、このような指導を受けた学生のほとんどが英語の音声の特徴に耳が反応し始めたと書いており、中には少数だが「英語が聞き取りやすくなった」、「聞き取れる音の数が増えた」、「洋画を見ているときに『ああ、あの音だ』と分かってうれしかった」、「通っている英会話学校でネイティブスピーカーの講師から英語の発音が良くなったと言われた」と書いている学生もいる。また、「英語らしく発音するのは恥ずかしいことではないと実感した」、「以前よりも少し自信を持って英語を話すことができるようになったので、英語を話すことが楽しい」という感想もある。

英語音の特徴に気づかせ、その特徴を強調しながら自分で発声練習をして自分の耳(脳)にフィードバックを与えることにより、脳の中に英語音の範疇がしっかりできあがり、それがリスニングと発音の両方に良い影響を与え、その成功感(達成感)が自信につながり、英語学習に対するさらなる動機付けとなっているのである。

2. アンケート調査より

ここでは授業で使ったテキストの内容に対する受講生の感想を元に、彼らがどのような知識を求め、どのようなものに実用的価値を見出しているかを探してみたい。ただし、今回のアンケート

対象者は30数名と少人数であり、また授業そのものも条件をコントロールした実験的なものではないので、今後の検証課題を探ることが主目的である。従って、アンケートの回答傾向については大雑把な言い方で表現するに止め、%などの数値はあえて示さないことにする。

授業で用いたテキストはO'Connor(1980) *Better English Pronunciation* である。この本は、外国語として英語を学ぶ学習者向けに書かれたもので、そのタイトルどおり学習者の英語の発音をより良くすることを目的としている極めて実用性の高いものである。全7章から成っておりそれぞれの主な内容は次の通りである。

- 1章 概論 (外国人学習者の問題点、練習の必要性、どの英語を学ぶべきか、など)
- 2章 発声器官の仕組み
- 3章 英語の子音の調音法
- 4章 子音連続の発声法
- 5章 英語の母音の調音法
- 6章 英語のリズムの特徴
- 7章 英語のイントネーションのパターンとその意味

1章については、ほとんどの学生が興味を持って学んだということがアンケートから読みとれる。興味の対象は様々だが、どの英語を学ぶべきか、どのように発音の練習はすべきか、外国人が英語を聞き取れないのはなぜかというような内容に興味を覚えている学生が多い。これから学ぶ事柄の大切さがきちんと納得できたので、2章以降の学習への良い動機付けになったというのがその理由である。

これに次いで多かったのはリスニングの練習法についてである。テキストのほとんどは発音練習の話であり、リスニング練習の仕方はこの最初の章で簡単に述べられているにすぎない。しかし、興味を持った学生が多いということは、英語が聞き取れないという悩みがあっても何をどうやって勉強したらいいかわからないでいる学生が少なくないことを示していると思われる。

実際、授業全体に対する感想の中に「今までは

どうやって勉強したらいいか分からなかったが、具体的な勉強の仕方(発音やリスニングの練習の仕方)が分かってよかった」という回答がかなり見られた。勉強(あるいは練習)の仕方が知りたい、というのは多くの学生の切実な願いであろう。逆に言えば、勉強(練習)の仕方というようなことはほとんど教えられていない、というのが実情であるということが分かる。

2章については、興味を示していない学生が大多数である。発声器官の小難しい名称やその働きなどは知らなくても発音練習には影響ないと感じているからであろう。実際、授業でも黒板に図を書いて説明することが多いので、ほとんど発声器官の正式な名称を使うことはない。学生はとにかく実際の練習を求めているようで、「まだ発音練習にならないのかと思った」というような感想がいくつか見られる。

3章については、かなり多くの学生が興味を示しているが、そのほとんどは「英語という言語ではこれほどまでに子音が重要な役割を果たしているのかということが分かって興味深かった」という理由による。またリスニング練習や発音練習を通じて似たような子音でも日本語のそれと英語のそれでは全く違うということに気づき始めたことも、強い関心を示す結果につながったと思われる。他に多かった感想としては、「練習が多くできて良かった」、「体系的に学べたのが良かった」、「発音記号が理解できて良かった」、「リスニングの役に立つような気がする」などがある。実用的な内容が評価されていることが分かる。

4章については、ほとんどの学生が非常に興味を示している。子音と子音の間に母音を挟まずに発音することによっていかに英語らしくなるかということを目の前で示されることにより、なんとかそのような発音ができるようになりたいという強い願いが生じてきている、ということがアンケートの文面からひしひしと感じられる。反面、日本人にとっては非常に難しい発音になるので、あきらめムードになってしまった学生も少数いたようである。

5章についても多くの学生が興味を示している。ここでの特徴的な感想は「今まで英語の母音につ

いては非常にあいまいに覚えていたのが今回しっかり理解できて良かった」というものである。日本語は極めて簡明な母音体系を持っているため、きちんとした音声指導でも受けない限り、英語のような複雑な母音体系を理解し身につけることはほとんど不可能に近い。にもかかわらず、英語には微妙な違いを持つ多くの母音があるということだけは英語学習の割と早い段階で知らされており、当然試験でも知識を問われるので、そのことが不安や自信のなさ、ひいては英語に対する興味のなさにつながっていたことが分かる。

6章については、ほとんどの学生が興味を感じている。特に英語には独特のリズムがありそれが英語らしさの元となっているということ、本来のリズムを伴わない英語は全然英語らしく聞こえないこと、またそれを身につけるにはどのような練習をすればよいか、といったことに強い関心を示している。そしてこの強い関心は、それまで自分の英語にはあるべきリズムがなかったということに気がついたということの証拠でもある。英語らしいリズムで話せたときの気持ちよさを書いている学生も何人かいる。

7章については、授業時間が足りなくなり非常に駆け足で説明し、また練習も少なかったにもかかわらず、ほとんどの学生が興味を示している。その多くは、英語でコミュニケーションを図る際にイントネーションが非常に大きな役割を果たすということをはじめで知ったことによるものである。また「イントネーションにも一定のパターンや決まりがあるということを知ってためになった」という記述も多く、この内容に実用性を感じているということが伺える。日本語が比較的平坦なイントネーションであるためか「英語のイントネーションは大げさに聞こえ、それを真似するのはどうも苦手だ」という回答もあった。

上で紹介した感想はほとんどが授業内容に対して肯定的な評価をしているものであるが、当然、否定的な感想もたくさんある。ただ、既に述べたようにこの小論の目的は今後実証的な研究をする価値があると思われる課題を見つけることにあるので、あえて肯定的な感想だけを取り上げ、そこから学生が英語の学習に対して何を求めているか

を読み取ろうと試みた。その結果、一般に次のような傾向が見られると言えよう。すなわち、学ぼうとしていることに対して分かりやすい説明がなされ、その価値や意義を納得してから学びたいという気持ちが強いということ、単なる説明だけでなく実際にやってみて体験的に学びたいという欲求があること、また、実際に体験してある程度達成感や成功感を味わうことができ初めて、学んだ事柄に実用的価値を見出し、そのことが自信や積極性を生み、その後の継続的な学習努力へと繋がっていくということである。

3. まとめ

本小論で述べたことをまとめると次のようになる。まず、SLA環境の実現が非常に難しい日本では、英語の音声面に関しても、臨界期以降でも可能な、日本人に適した指導がなされるべきである。特に、英語のあらゆる力の基礎となる語彙の学習においては、心的辞書の性質上、単語を音声イメージと共に学習していかななくては効果が上がらないため、ある程度英語らしい発音が出来るということは非常に重要である。また、英語らしい発音が出来ることによって、英語によるコミュニケーションに対してより積極的になれるということが期待できる。従って全ての英語学習者が、どこかの段階で英語音声の指導をきちんと受けることが望ましい。

ここで紹介した英語音声の指導法は決して難しいものではなく、英語に対する苦手意識がある学習者でも問題なく取り組むことができる。また、臨界期を過ぎても十分に効果が期待できると思われる。十分な実証研究がそろわない段階で、焦って学習開始年齢だけをどんどん下げていくのはある意味危険な賭けでもある。臨界期後でも可能な方法があるのなら、そちらを選ぶのに何の問題もないはずである。

ただし、英語学習の基礎となる部分であるため、早い時期に学ぶ機会があれば、その後の英語学習における負担が相当軽減されるであろうことは間違いない。「英語音声学のような授業は英語を習い始める中学生の時から必要なのではないかとつ

くづく思いました。もっと早く学びたかったなあと思います」という回答からもその必要性が見取れる。

また、音声指導の大まかな目標(目安)というものを設定する必要がある。ただし、「せめて... くらいの発音レベルまでは到達して欲しい」というような単純な目標設定の仕方では意味がない。「... の段階で... ぐらいの音がマスターできればその後の英語の学習(習得)がスムーズにいくであろう」というような指導の指針が明示されることが望ましい。このような指針の確立は、SLAの視点から見れば当然のことであり、そう遠くない時点で可能になるであろう。

また、英語音声の指導との関係で考えなくてはならないことの1つに文字の導入時期の問題があると思われる。小学校段階ではできるだけ文字を使わず音声のみで英語活動するのが良いと言われているが、できるだけ英語らしい音声を習得するには、文字の助けを借りた方がはるかに効率が良いと考えられる。これにはフォニックスの学習も必要となるが、フォニックスについては何か誤解があるようで、日本の英語教育に積極的に取り入れられていないのが残念である。「英語活動ではアルファベットは絶対使わないんだ」と声高らかに宣言している教室の隣の教室で、「チョコレート」を訓令式ローマ字で「tyokoreito」と書かせている、という笑えない実話もある。ローマ字の問題は早急に対応すべき事柄を含んでいると言える。

本小論で述べたことの多くは、筆者の経験と学生アンケートから拾い出したものであり、実証的な研究に裏づけられているものではない。しかし、その1つ1つが、今後実験的研究により検証される価値が十分にあると思われる。

筆者の授業を履修した34名の学生の中に東南アジアの国からの留学生が1人いたが、その学生はアンケートの最後に次のように書いている。

「私の国の社会言語は英語なので、日本人の発音を聞いてなんかおかしいと思います。特にvの発音です。」

これは、分かっているとはいえ、ある意味非常にショッキングな感想である。英語教育はその時その時の流行を求めてきた。しかしそのような流れの中にあっても、絶対に外してはならない英語力の基礎というものを見失うことがないようにしたいものである。

注

1. 文字を読む際に全ての文字や単語が脳内で音声化されなければならない、というわけではない。「文字→音声→意味」というプロセスで意味を理解するのは「文字→意味」というプロセスに比べ1ステップ余計に手間がかかるため、使用頻度が高く意味が具体的な単語などは、中間の段階をスキップしていちいち音声化しなくても文字から直接意味を理解できるようになる、とされている。(安西他、1992) また日本語の場合、漢字は絵的要素が強いため、音声化せずに意味を理解することが平仮名に比べ容易であるという。(竹内、2000)
2. Adrian J. Pinningtonは*Inside Out* (1986、三修社)という著書の中で、日本人が英語が上手くならないのは、常にお手本通りを目指す日本人(日本社会)の学習スタイルが、独自性や創造性を必要とすることばの習得や使用に全く向いていないためである、と述べている。英会話スクールの乱立はまさにそのことを証明している。日本人にとって英会話は「学ぶもの」であって「するもの」ではないのである。
3. 既に述べたように常にお手本の完全なコピーを要求する日本型学習スタイルでは、外国語の学習においても最初から正確さを求めすぎるといった大きな問題がある。中学1年生の1学期から、中間テストや期末テストで小さなミスを訂正される。これを繰り返して経験させられていくと、言葉の学習であるにもかかわらず、「間違えてはいけない」というどうしようもなく強い強迫観念が生徒の中に出来上がってしまう。あ

る研究者が英語学習に対する不安要因をアンケートで調査したところ、一番大きかったのが「間違えることへの恐れ」だったという。(宮本友紀さんとの私的談話による。)

SLA研究の成果の中でも、今後日本の英語教育でもっともっと強調されていくべきことの1つが、言葉の学習というものは「(教える側が学習者の学習段階を完全にコントロールして) 1つ1つの段階を着実にマスターさせていく」というようなものではなく、「いろいろな段階を行ったり来たりしながら、(教師の助けを借りて)学習者自身が少しずつその言語の特徴に気づき始め、最終的にその言語を使うために必要十分な知識を身につける」という性質のものである、ということであろう。太田他(2003)によれば、彼らの勤めている中学校の生徒たちの英語力は中学2年生の秋から冬頃にかけて飛躍的に伸びるのだという。そしてそれは、その頃になってやっと生徒たちが英語のSVOという基本的な語順をある程度自由に使えるようになることに関係しているという。中学1年の最初から出ているSVOでさえ1年半ぐらいは学習者の頭の中に「潜伏して」定着を待っているのである。

参考文献

- 安西祐一郎、石崎俊、大津由紀雄、波多野誼余夫、溝口文雄(編). 1992. 『認知科学ハンドブック』. 共立出版.
- Kimura, Y. and M. Otagaki. 2000. "The Effect of English Language Teaching at Elementary Schools on Children's Character Formation: A Pilot Study". JACET Bulletin. No.32: 49-61.
- 小池生夫(監修). 1994. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』. 大修館.
- 河野守夫、津村文雄(編). 1985. 『Listening & Speaking: 新しい考え方』. 山口書店.
- Levelt, W. 1989. *Speaking: From Intension to Articulation*. MIT Press.

- Lightbown, P. and N. Spada. 2000. *How Languages are Learned (Revised Edition)*. Oxford Univ. Press.
- O'Connor, J. D. 1980. *Better English Pronunciation –New Edition–*. Cambridge Univ. Press.
- 荻原 洋. 2004. 「ボトムアップ・リスニングー実践報告ー」. 富山大学教育学部紀要. No.58 : 109-120.
- 太田 洋、金谷 憲、小菅敦子、日臺滋之. 2003. 『英語力はどのように伸びてゆくかー中学生の英語習得過程を追うー』. 大修館.
- Rost, Michael. 2002. *Teaching and Researching Listening*. Pearson Education.
- 竹内 理(編著). 2000. 『認知的アプローチによる外国語教育』. 松柏社.